

第二帝政がもたらしたパリの都市衛生

—近代下水道の構築から考える—

[誘導展開型]

後平 佐保子（経済学部4年）

指導教員：伊藤 行雄

本論は、ある極めて単純かつ不可思議な一つの問いに答えを与える事を目的としている。それは、かつて想像を絶するほどの不潔さで知られていたパリの街が、いかにして現在、「華の都」とよばれるまでに至ったのか、という問いである。この問いはあらゆる分野が関係する難題であるが、本論文では特に都市衛生について取り上げる。そして特に、都市衛生を保つために極めて重要な「排出」という機能を一手に担う近代下水道の構築と、その工事にとって決定的な貢献をなした第二帝政という時代に注目する。また本論文は、都市の衛生を決定づける要因として、人々自身が持つ衛生観やそれに基づく生活習慣と、そうした営みを支える都市のシステムという二つを議論の軸とする。

下水道という地下深く、光が届かぬ非日常的な空間は人々の想像を掻き立て、多くの文学の舞台ともなった。そうした普段は見えない都市の機能こそが、18世紀の産業革命を経て一気に近代化へと拍車がかかったパリの街に最も欠けていたものであり、その構築には多大な困難が伴う分野であった。本論文は、都市の中でも特に不可思議な空間に支えられた都市衛生の整備をひも解く事で、現代すでに近代化を果たした都市に住む人々に、そして今まさにその坂にさしかかっている都市の人々双方に、その生活の器に対する新たな見地を提示する事を最大の目的と定める。